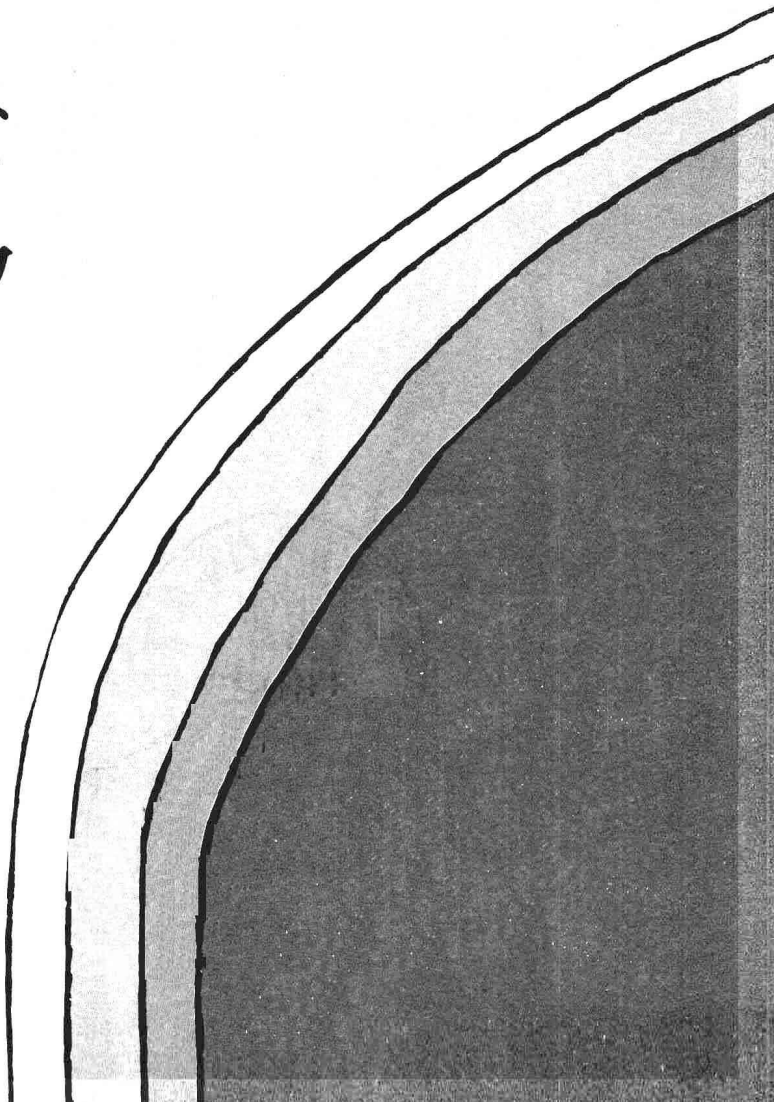
雪にとぶ鳥

中河与一



読売新聞社

雪にとぶ鳥

昭和五十年三月十五日　第一刷

著者　中河与一

編集人　松田延夫

発行人　二宮信親

発行所　読売新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区大手町一の七の一
〒五三〇　大阪市北区野崎町七七
〒八〇三　北九州市小倉北区明和町一の一一

印刷所　株式会社三陽社
製本所　大口製本印刷株式会社

定価　一、二〇〇円

©, YOICHI NAKAGAWA, 1975

0093-701720-8715

雪にとぶ鳥

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

白いワイシャツの上に黒い背広を着、黒いネクタイをむすび、黒いソフトを冠り、黒い靴をはき、そのうえ度はずれて大きく薄い黒い楽譜の入ったカバンをさげている。それが彼らの制服姿であった。

それを彼らは異様なほど磨きのかかった精神の充実した粋な服装であると思っていた。

それほどそれはその頃の一般の詰襟の学生服とはちがって、宗教的にさえ見えた。時には丸襟（ラウンド・カラー）の僧服の下に、燃える青春をかくしながら、群をなして歩いている鳥のようにもみえた。

新学期が始まって間もない頃、彼らはその僧服のような制服をつけて、新緑が上からかぶさり、その下の空気を緑色の香気に染めている道を学校の方へ歩いて行った。

そこには大きい白い煉瓦作りの図書館につづいて、赤褐色の美術研究所の建物があり、その角を右にまがると、美術学校の古めかしい校舎と向きあって、これも古びた黒い木造の門が建っていた。

その門には白木の板に「T音楽学校」と書いた表札がかかっていた。日本唯一の官立の音楽学校にしては余りに粗末にみえたが、装飾のないその門が彼らにとっては却って一つの逆説のように誇りに思えた。それは男女共学という点でも、当時においてはたった一つの学校で、いかにも自由な学校のように思われていた。然もそこにいる学生達は選ばれた連中として全国から集ってきた者達で、みな自分の才能に自信をもち、華やかな未来を心に描いていた。

道を曲ると、急に度はずれた発声練習の音階や、金属的なピアノの高い音や、ふるえるヴァイオリンの旋律や、琴の押えた音色が、ひとかたまりの大きい騒音になって一度に耳に入ってきた。

校門のわきには楠の大木と爛漫と咲きみだれた桜の古木が、二階建の校舎よりも高

くのびていた。

更に入ると泰山木の繁みの中に、髪を後にかきあげたうつむき加減のブールデル作のベートーヴェンの胸像が石の台座の上に立っていた。その台座の表にはARS LONGA VITA BREVIS とラテン語で刻んであった。芸術こそは永遠であると、彼らはそれを見るたびに何時もそこで考えた。

船川未乾（ふなかわみけん）は登校のたびに、その辺の道で何時も数人の友達に出逢った。

その中に香田悠子がいるのを見つけると、彼は異様に胸がふるえた。どうしてであるかわからなかった。それを意識し始めたのは入学して二、三ヶ月たった頃からで、それも火水木にはめいめいの時間割りの関係で、きまって彼女に逢えることが次第にわかってきた。

緑の中から現われる女性——何時からか彼は彼女のことをそう思うようになっていた。鶯谷から登校する彼が図書館の前までくると、何時も数人の友達が京成電車の建物の蔭から現われた。その中に彼女はきまっていた。

愛媛県の宇和海に面した辺鄙な城下町から出てきたばかりの未乾にとって、総ては余りにも驚きにみち、殊に彼女の洗練せられた風姿は見とれるような強い憧れの気持

を彼に感じさせた。
そのうちに、いつか末乾は図書館の前で彼女を心待ちに待つようになった。
「今日は彼女に逢える」
そんな日の朝、彼は早くから眼がさめた。何時もは祖母に何度も声をかけられ、しまいには布団まではがされる彼であるのに、その曜日になると、きまって一人でさっさと起きだし、床をたたむ。祖母は不思議そうに眼をみはって
「末乾さん、何かいいことでもあるのね。まるでいい人にでも逢いに行くみたいな顔している」
と言ってからかった。祖母は明るい屈託のない女であった。年寄りくさい暗さや、みじめさのないのが末乾は好きであった。
すると、兄がそのあとを引きとって
「ほんとだ。今朝の末乾は馬鹿に明るい顔をしてる。好きな人が出来たのなら、まず僕に逢わせろよ。僕は東京に於ける保護者だからね。僕の許可がなけりゃデートすることも出来ない筈だよ」
祖母や兄達にからかわれ、不思議がられたとしても無理はなかった。大体血圧の低

い未乾は朝の目醒めの決していい方ではなかった。何時もは不機嫌でむっつりした顔で朝食を取り、一言もしゃべらずに学校へ出かけることもあった。それなのにそんな日の未乾は生き生きとして、うるさいほど祖母や兄に話しかけ、白い歯をみせてよく笑った。

「未乾さんって、このごろ周期的に御機嫌がよくなるのね、変ねえ」

と祖母は老いの眼を好奇心に輝かせて笑った。兄や祖母に何とかまわれても、そんな日の未乾は決して腹をたてなかった。

そんな或る日、久しぶりに豊橋から母が上京してきた。母は兄や未乾の大好きな豊橋の竹輪を重そうにかかえてきて、玄関を入ると、まっすぐに台所にいき、冷蔵庫の中にそれをしまいながら、日曜日で家にゴロゴロしていた未乾に言った。

「未乾さん、あんた好きな人が出来たんですって」

「えッ」

と未乾は驚いて母の顔を見つめた。そして兄か祖母がもう手紙で母に注進したのだろうと察した。母はニコニコしながら

「好きな人が出来るのは結構だけど、母さんに内緒は駄目よ。一度、豊橋のうちへそ

の方を御つれしたら」

と言った。

然し未乾はまだ相手の心もわからないのに、と腹だたしかった。そして母の言うように、悠子を豊橋へつれて行けるようになったら、どんなに幸せであろうと思った。すると彼女は彼のことをどう思っているのだろうかと、急に心配になってきた。自分の方で好きなだけのような気がし、一人角力(ずもう)をとっているような気持になった。これは片想いなのかもしれない、と彼は思った。

母は一週間ほど滞在して、これから夏に向って着る未乾や兄や祖母の衣類の問題について、間違いのないようにと頼みこんで帰って行った。

悠子に逢える日、未乾は何時も三十分ほど早く家を出た。彼は図書館の横手の柳の並木の辺りをゆっくりと徘徊しながら、電車がホームに着くたびに駅からはきだされてくる人波に眼をこらした。友達に見つからないように気をつかって、木の蔭に身をよせ殆ど夢中で彼女の姿を待った。

彼女はなかなか現われなかった。電車はどうでもいい人達をやたらと乗せてくる。伊賀三郎が、ピンクの派手なワンピースを着たマグダラのマリヤとひそかに徒名(あだな)され

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ている加田春美と腕を組んで歩いて来た。彼はすぐ柳の木蔭に身を寄せた。加田春美は誰れとでも寝るというもっぱらの噂で、彼女の胸も腰も魅惑的で、セクシーな感じのする女であった。彼は彼女の目だちすぎる扮装とその物腰が何時も気にいらなかった。

そのあと中山薫良が一人でやって来た。彼は相変らず沈痛な顔をして、うつむきがちに楽譜をかかえて歩いて来た。未乾はイライラしながらしきりに傍らの柳の葉をむしっては焼けくそに地面に投げつづけた。ふと気づくと足もと一面に柳の葉が散りしいていて、彼は何となく心にとがめた。罪もないのに八つあたりしているような気持であった。彼はあわててその葉を足でかき集めた。

何時もの彼女のグループが駅の出口から出てきた。あたりがパッと明るくなり、すがすがしい風が彼の胸の中を通りぬけて行った。

華やいだおしゃべりの声が小鳥のさえずりのように聞える。彼女達のうっすらと刷いた白粉や紅の匂いが、かなり離れている未乾のそばまで匂ってくる。彼の眼は大きく見開かれ、彼女の姿に集中するが、幾ら眼を見張っても、彼女の姿をそのグループの中に捕えられない日が幾日かあった。そんな時の彼は絶望し、もう学校へなど行く

ものかと思う。彼女が何処に住んでいるのか、もしや病気ではないのか、それとも彼女は退学し、もう永久に来ないのではないか……

その日も未乾は華やかなグループの中に彼女を見出すことが出来なかった。彼女の何時ものグループはみんな未乾のひそんでいる柳の木の前を通り抜けてしまったというのに、彼女の姿は見当らなかった。彼の心は虚脱したようによどみ、彼はもう歩くのもいやであった。彼は柳の木によりかかって煙草に火をつけると、空に向けてやけに吹かした。

と、突然、彼女が駅の出口に現われた。電車が着いた気配をその時感じなかったので、それは全く突然に思われた。未乾は喜びのあまり、思わず彼女の前へ飛びだしてしまった。

彼女は突然自分の前に立ちふさがった彼を見て、大きく眼を見張り、それから例の眼を細めるような表情になり、軽く会釈して、そのまま足早に立ち去ってしまった。彼女は一言も声をかけてくれなかったが、うるんだような瞳が未乾の心に焼きついた。何も言わなかったが、あの瞳は確かに何かを自分に語りかけていた。あの眼は自分を嫌っている眼ではない、と彼は思った。が、また、いやそうではない、彼女は自分が

何時も此処で待ちうけているのを何時の間にか知り、自分のこんな行為をさげすみ、それをなじっている眼だったと彼は思い、彼女は自分を避けるために、わざとみんなを先きにやりすごし、自分があきらめて此処を立ち去った頃を見計らって、ゆっくり出て来たのかもしれない……自分は彼女に嫌われているのだ、と思った。激しい心の葛藤をくり返しながら、その日、彼は学校の門をくぐった。

彼はその頃、祖母と兄と三人で学校から三十分ほど離れた一寸した門構えのある家を駒込に借りていた。兄は東京大学の文学部東洋史学科に籍をおいていた。

悠子は彼よりもずっと後になって彼を見つけるのが常で、それは彼女が近視であったからで、彼女は少し近づいてから眼を細めるような表情になって彼をたしかめた。そして彼に軽く会釈した。それが印象的であった。

背丈は女としては稍々高い方で、髪の黒い、肌の白い、顔や口の小さめな、鼻梁(びりょう)のとおった、伊賀三郎に言わせると、グレコの描く女のように少し痩せすぎて、神経質にみえる身体つきをしていた。胴(ウエスト)が蜂のように細くしまっていた。男の学生達の噂は何時も彼女に集っていた。

彼女達の制服は紺色のワンピースか、同じ色の和服にきまっていた。夏がくるとそ

れが薄色の麻地のような短い袖のワンピースか、そうでなければ同じ色の和服に変った。

ただ彼女達の場合は私服が許されていたから、必ずしも制服を着ないでもよかった。殊に式の日とか、校内演奏会の時などには、彼女達の多くは、濃い鼠色の紋つきに紺色の袴をつけて、それにあう草履をはいたりしていた。そんな時、襟もとの白い半襟が彼女達を急に大人っぽくみせて、そのうえうっすらとつけた白粉や口紅があらためて異性を彼らに感じさせた。

二

そんなにして一年たった学期末の頃、未乾は山木教授からシューベルトの「冬の旅」を課題として与えられた。それをレコードか何かで全曲頭に入れて来いというのであった。

それはミュラーの詩によった歌曲で、シューベルトの死の前年に完成せられたもので、彼における最大の作品であった。全曲を歌うだけで一時間以上かかった。失恋の漂泊を主題にしたもので、それは二十四曲から成立していた。

シューベルトはシューマンや、ブラームスや、ヴォルフに較べると、詩の理解が必ずしも深かったとはいえなかったが、この作品だけは別のように詩想が曲の中でいきいきしていた。

いってみればそれは絶望と悲哀とが入りまじりながら、人間を荒涼とした世界につれてゆくような悲痛な歌であった。

然し彼はその楽譜を持っていなかった。その頃は洋書のなかなか手に入りにくい時代で、注文しても数ケ月かかるのが普通であった。当惑している時、たまたまそのペテルス版を香田悠子が持っているという噂をきいた。

彼はその偶然に喜びを感じながら、不安な気持でたのんでみた。

「君の―冬の旅―貸してほしいんだけど」

「ええ、いいわ、お役にたつかどうか」

余りにもこだわりのない都会人らしい承諾で答えてくれた。初めて交した会話は嘗て聞いたこともないような種類の声として彼の心に残った。然し未乾は悠子が自分に関心をもっているかどうかをそれで判断することは勿論出来なかった。それに戦争が始まっていたから、共学とはいいながら、男女は校内で私用の話をしてもいけないことになっていたし、だから彼らはパイプオルガンのモーター室の前とか、時計台の下とか、人に眼だたないところで話すより仕方がなかった。

その翌日、彼女はそれを時計台の下の胸像の前で彼に渡してくれた。言いしれぬ喜びが彼の胸をとどろかせた。

「冬の旅」の楽譜には高声用、中声用、低声用の三種類がある。その中で彼の声域に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com